

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22510267

研究課題名（和文） モンゴル国オングー河流域におけるニンジャの実証的研究—遊牧民との社会関係を中心に—

研究課題名（英文） Empirical Research of Ninja in the Ongi basin, Mongolia: Focusing on Social Relationship to Nomads

研究代表者

思 沁夫（SI QINFU）

大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

研究者番号：40452445

研究成果の概要（和文）：

本研究は、民主化以降のモンゴルにおける環境及び貧困問題の象徴である「ニンジャ」を研究対象とし、現地での調査、対話、交流などを通じて「ニンジャ」問題が形成される社会的要因を解明するとともに、モンゴル政府、国民、国際社会に対し解決案を示した。また、本研究は「ニンジャ」研究の草分け的な役割を果たし、「ニンジャ」問題をモンゴル、さらに国際社会へ広く発信する努力を行った。

研究成果の概要（英文）：

Through the field research, conversation and interchange objecting “Ninja”, symbol of environment and poverty issue after democratization in Mongolia, the clarification of social factors forming “Ninja” problems was studied and the solution was proposed to Mongolian government, people and international society. This research was one of the pioneers of “Ninja” research and endeavored to make Mongolia and the world publicly known “Ninja” problems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：東アジア、ニンジャ、ゾド(自然災害)、鉱物資源、自然環境

1. 研究開始当初の背景

1990年以降、モンゴルでは民主化と共に市場経済が導入された。社会転換において、社会は無秩序化、環境問題が深刻化し、貧困化現象が拡大した。「ニンジャ」問題はどちらにも関係する問題であるにもかかわらず、ほとんど研究が行なわれていないのが現状である。また、実証的なデータによる裏付けがないにもかかわらず「ニンジャ」を環境破壊

者として批判する風潮が蔓延し、社会の「分断」になりかねない状況であった。

2. 研究の目的

本研究は、モンゴル国オブルハンガイ県オングー河流域における「ニンジャ」と遊牧民について、1) 両者の複雑かつ流動的な社会関係、2) 両者を結びつける宗教（ラマ教）の役割の調査を通じ、「ニンジャ」の実態を

複合的かつ実証的に理解することである。市場経済導入以降、モンゴルが陥った非循環型の自然環境システム、人間社会システムの問題を映し出す「ニンジャ」という社会現象を分析し、新たな社会関係や宗教思想がもつ可能性を提示することにより、地域社会の生存基盤を循環型にする方策を見出すことを目的とする。

長年、モンゴル研究＝遊牧研究であった。都市化やニンジャのような民主化以降中心の社会的変化に対する研究はこれまでほとんど存在しなかった。本研究は、モンゴルにおける研究及び新しい方向性、内容を開拓することも一つの目標に掲げた。

さらに本研究ではニンジャあるいは遊牧民、モンゴル民主化以降、モンゴル社会は崩壊、分裂し、貧困や環境問題など様々な問題が発生、山積する中、実践的な研究、モンゴルの未来づくりに役立つ研究を意識した。

3. 研究の方法

本研究は、人類学的調査の中でも、特殊な社会的人びとを対象とした調査である。そのため「ニンジャ」との信頼関係の構築に尽力し、長期的に調査を進めた。実践重視のため、「ニンジャ」、遊牧民、行政、宗教の4者と問題意識や認識の共有のためのワークショップ、会議などを考案し、実施した。また、地域の思想を発展させるため、文献解説など複数の手法を複合的、総合的に導入した。

さらにニンジャと共同でドキュメンタリーを作成、ワークショップを開催した。ニンジャの外部に対する警戒心を払拭すると同時に、彼らの視点と立場に立った手法を通じ、意見や考え方を社会的に発信する方法も考案した。

4. 研究成果

①客観性と中立の立場から「ニンジャ」ら(20人)の活動、生活、家族構成及び政府や周辺住民、遊牧民との関係を記録したドキュメンタリー映画(「ニンジャの新年」35分間)をモンゴルの民間テレビ局と共同で作成、また、当テレビ局を通じて放送した。本ドキュメンタリー映画(映画製作に当たり430時間以上の撮影を行なった)は、貴重な記録であると同時に、客観的な報道が珍しいモンゴルのマスメディアにおいて、客観的にニンジャ現象を考える数少ない情報源になったと考えられる。

②本研究のスタート時点から進められているツェブルワンチグドルジの経典(オブルハンガイ県の自然環境と人間関係に関する部分)解説作業は終了し、本研究テーマと関連する経典内容の翻訳(チベット語からモンゴル語)及び詳細な注、解説を付けた本(報告書)をモンゴル国仏教大学の協力を得て、モ

ンゴル語で出版した。この研究成果は、地域社会の再生と循環的自然資源の利用を考える上で、非常に意義深いだけでなく、モンゴルの仏教研究、また、地方生態史の研究などにとっても意義あるものと考えられる。

③2011年8月アルバイヘイル町で、地域の政府関係者、環境保護者(NGPの代表者)を集め、ワークショップを開催した。本ワークショップを通じ、ニンジャの置かれている状況、ニンジャの発生要因などの研究成果を報告すると同時に、彼らと意見交換をし、様々な情報を収集することができた。政府関係者と環境保護者が一体となり、ニンジャ問題について議論を交わすというのは、今回が初めてであった。また、研究成果を地域に発信し、社会的な実践に活かす目的も果たした。

④絵の環境破壊とニンジャをテーマにした絵画コンクールを中学生と大学生を対象に教育事業の一環として実施した。オンギー河流域の8つのソムの中学生在が、ニンジャと水に関する絵画を描いたほか、貧しい大学生支援、モンゴルの持続的環境維持を目的に大学生が作品を描いた。

このように、本研究は「ニンジャ」研究の草分け的な意味を果たしたといえる。また、学術研究及び発表のみならず、ドキュメンタリー、マスメディアを通じ、研究成果と「ニンジャ」の実態を世界に発信し、モンゴル、フランスをはじめ、世界で評価されたことも研究成果として挙げられる。2011年以降、ニンジャに対する社会的関心は高まり、さまざまな解決に向けた取り組みがなされてきており、この動向に本研究の果たす役割は大きい。

現在、モンゴル国立大学のニンジャ研究、ケンブリッジ大学が企画実施するモンゴル鉱山研究として、「ニンジャ」研究は継承されている。また、若手研究者の育成も重視、貢献した。ケンブリッジ大学及びモンゴル国立大学の博士課程の学生教授らと協力し、学生らはニンジャに関する博士論文を執筆した。追加調査と研究を進め、イギリスとモンゴルからニンジャに関する図書出版を行った(図書⑤を参照)。ニンジャとモンゴル国立大学における学生、教授らとのワークショップの実施はモンゴルのメディアで報道され、ニンジャ問題に対する解決にむけた方法の活発な議論を世論に向けて喚起した。

また、モンゴル研究といえば、これまで遊牧の研究が中心であったがこの「ニンジャ」研究により新たな研究領域が構築されたとと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

- ① 思沁夫「モンゴル人の情報伝達方法及び利用方法と今日的な意味」Heisset W. C. eissig 編『12世紀～13世紀にかけてモンゴル帝国文化の世界史的意義とコミュニケーション性に関する学際的研究』第1巻、pp. 10-30、2012年。(査読あり)
- ② 思沁夫『母鹿の歌』とエヴェンキ人の自然観」中国エヴェンキ研究会編『エヴェンキ研究』16:3-19(原文エヴェンキ語)、2012年。(査読あり)
- ③ 包・思沁夫「北方少数民族の伝統食から食文化の『個性』と『多様性』の可能性と課題を考える」中国農業大学学報編集部編『2011年Ⅲ期 中国農業学報』2011年、pp. 122-41。(査読あり)

〔学会発表〕(計9件)

- ① 思沁夫『水源の悲劇』—モンゴル・オンギー側開発史と砂金採取者」、国際会議「モンゴルにおける鉱業開発の諸問題—歴史的視点から」、2013年2月15日、国立民族学博物館。
- ② 思沁夫「モンゴル帝国とグローバル世界史」国際シンポジウム、2013年1月5日、ボン大学、ドイツ。
- ③ 思沁夫「地域研究と自然科学の協働—広域アジアの地域研究を例に」地域コンソーシアム(JCAS)年次集会シンポジウム、2012年11月3日、北海道大学スラブ研究センター。
- ④ 思沁夫「循環社会の構築と実践」中国・スイス・ドイツ3国による国際シンポジウム、2012年10月5日、北京、中国。
- ⑤ 思沁夫「ニンジャ研究成果と社会的な意義」ニンジャに関する国際会議、2012年9月5日、モンゴル国立大学、モンゴル。
- ⑥ 思沁夫「モンゴル人の食文化と食の安全」国際会議、2012年7月14、15日、内モンゴル自治区、フフホト市。
- ⑦ 思沁夫『罪』と『罰』: 自然をめぐるコンフリクト—モンゴル国における『ニンジャ』とその背景・社会状況」大阪大学グローバルCOEプログラムコンフリクトの人文国際研究拠点研究・コンフリクトの人文学セミナー、2012年3月15日、大阪大学。
- ⑧ 思沁夫「モンゴル国都市部における食生活事情と健康問題」(Circumstances of Food Issues and Health Problems in Urban Mongolia)国際シンポジウム「グローバル化と少数民族の食・安全・健康」(Globalization and Ethnic Minorities:

Food, Safety and Health)2011年12月、北京、中国。

- ⑨ 思沁夫『公有地』の悲劇: 草原の破壊と文化の破壊」中国環境学会—2011年度国際研究者による特別会議、2011年9月、北京、中国。

〔図書〕(計7件)

- ① 思沁夫「モンゴル語」津田守編『15言語の裁判員裁判用語と解説』pp. 185-228、現代人分社、2013年。
- ② 思沁夫「モンゴル高原における自然環境と遊牧生活: 遊牧民の経験から」大沼克彦編『ユーラシア乾燥地域の農耕民と牧畜民』pp. 1-19、六書房、2013年。
- ③ 思沁夫編『GLOCOLブックレット10 中国における食品の安全・安心』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、2013年。
- ④ 思沁夫・ポンブドルジェ『ツェブルワンチグドルジの経典(オブルハンガイ県の自然環境と人間関係に関する部分)解説とその解説』モンゴル国立佛教大学、2012年、総ページ数155。
- ⑤ 思沁夫編、ミーティングポイント社、「ブルンザイジバノー? : ニンジャ彼らの組織化及び生活様式」(英語)2011年、総ページ数220ページ。
- ⑥ 思沁夫編、内モンゴル自治区文化出版社、『チェグルハンチグドルの環境思想の解説』2013年、総ページ数605ページ。
- ⑦ 思沁夫編「オンギー川流域における環境破壊の実態及びニンジャ集落形成に関する調査報告書」モンゴル国立科学技術大学出版、2010年。

〔その他〕

ドキュメンタリー映画『「ニンジャ」の新年』(35分)モンゴル民間テレビとの共同作、テレビ局を通じて放映、2011年12月。

ウブルハンガイ県アルバイヘルルにおいて地域の政府関係者、環境保護者(NGPの代表者)らとワークショップの開催、2011年8月。

日蒙国際シンポジウム「遊牧の世界とニンジャたち」2011年3月22~24日、大阪・千里中央ライフサイエンスセンター。

大阪大学大学院高度副プログラム、サステイナビリティ教育プログラム・大阪大学人間科学研究科/人間科学部・グローバルコラボレーションセンター協力科目「環境と社会」「環境と社会特講」「環境問題への回路I・II・III」などの授業開講、実施

その他、JICA、民族博覧会、GLOCOL 共同開催のシンポジウム、会議などで研究内容、成果を複数回にわたり発表報告した。

ホームページ

GLOCOL

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/research/kaken/225102670.html>

アジア開発銀行モンゴルオフィス（モンゴル語）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

思 沁夫 (SI QINFU)

大阪大学・グローバルコラボレーション
センター・特任准教授

研究者番号：40452445